

発音練習(全学年用)

あえいう えおあお あおぞら たかい
かけきく けこかこ かきねの こぎく
させしす せそさそ ささぶね ながせ
たてちつ てとたと たけざお たてた
なねにぬ ねのなの ななつの なすび
はへひふ へほはほ はまべの ほぶね
まめみむ めもまも まめまき みてる
やえいゆ えよやよ やまゆり ゆれる
られりる れろらろ ランドセル なるよ
わえいゆ えをわを わなげを しよう

口の たいそう(低学年用)

ひろい そら しろい くも
ひろこさんの しろい ぼうし
しろうくんの ひかったくつ

えんぴつが いっぱん
えんがわに いすがある
いねの えを かく

だまつて いる ライオン
だれかが ラッパを ふく
ラジオの ダイアル
しんぶんしを すてた
しずかに すわった
すもうの しろぼし

まちへ まきを うりにいく
にんずうは にじゅう にん

きやきゆきよの うた

まど みちお

きやらきやら きよろきよろ きやきゆき
よ

しやばしやば しよほしよほ しやしゆしよ
ちやかちやか ちよこちよこ ちやちゆちよ
にやがにやが によこによこ にやにゆによ
ひやらひやら ひよろひよろ ひやひゆひよ
みやあみやあ みゆうみゆう みやみゆみよ

りやんりやか りよんりよこ りやりゆりよ
きやあぎやあ きゆうぎゆう きやきゆきよ
じやきじやき じよきじよき じやしゆじよ
びやあびゆう びようびゆう びやびゆび
よ
ぴやんぴやか ぴよんぴよこ ぴやぴゆぴ
よ

がぎぐげこの うた
まど みちお

がぎぐげ こぎぐげ がまがえる
がごがご げごげご がぎぐげご

ざりざり ぞろぞろ ざりがにが
ざりざり ずるずる ざりざり

だちづで だんごこ だちづで
だんごこ でんごこ だちづで

ばびぶべ ぼうぼう のびたかみ
ばさばさ ぼさぼさ ばびぶべ

ぱびぷへ ぽっぽう ほとぽっほ
ぽっぽろ ぺっぺろ ぱびぷへぽ

ちよろりとにげた
たちつてと

あいうえおうた

たにかわ しゅんたろう

なにぬねのうし
のねぬになけば
ねばねばよだれ
なにぬねの

あいうえおきろ
おえういあさだ
おおきなあくび
あいうえお

はひふへほたる
ほへふひはるか
ひかるよやみに
はひふへほ

かきくけこがに
こけくきかめに
けつとばされた
かきくけこ

まみむめもりの
もめむみまむし
まいてるとぐろ
まみむめも

さしすせそつと
そせすしさるが
せんべいぬすむ
さしすせそ

やいゆえよるの
よえゆいやまめ
ゆめみてねむる
やいゆえよ

たちつてとかげ
とてつちたんぼ

らりるれるるばが

ろれるりらっぱ
りきんでふけば
らりるれる

わいうえおこせ
おえういわらう
いたいぞとげが
わいうえお

ん

おにのおにぎり

おそろしい

おにの

おにぎり

おひめさまの

おだんごより

おいしい

おにぎり

おうさまの

おなかより



たにかわしゅんたろう
谷川俊太郎

おおきな
おにぎり

おおみそかに
おながざるが
おぼんから

おっことし

おしょうがつに

おつとせいが

おしりで

おしつぷし

おそろしい

おにの

おにぎり

おせんべになつた

くんぽんわん

谷川俊太郎

こいぬが くん

きつねが こん

きじなら けん

ぴかぴか きん

いたいよ ぴん

おこつて ぶん

おいしい ぽん

おてたま ぽん

きばつて うん

すいつち おん

まるいは えん

おやいぬ わん

たいこ

谷川俊太郎

どんどんどん

どんどんどん

どんどんどん

どんどんどん

どんどんどん

どんどんどん

どんどんどん

どんどんどん

どんどんどんどん

たいこたたいて

どんどんどん

どんどんどん

たんぽぽ

川崎 洋

たんぽぽが

たくさん とんで いく

ひとつ ひつつ

みんな なまえが あるんだ

おーい たぽんぽ

おーい ぽぽんた

おーい ぽんたぽ

おーい ぽたぽん

川に おちるな

おさるがふねをかきました

まど みちお

ふねでも かいて みましようとおさるが ふねを かきました。

けむりを もこもこ はかそうとえんとつ 一ぽん たてました。

なんだか すこし さびしいとしっぽも 一ぽん つけました

ほんとに じょうずに かけたなとさかだち 一かい やりました。

かたつむり リューニイ作

かたつむり
おかしいな

めだまが つのの うえに ある

おかしくない

おかしくない

めだまが うえなら よく みえる

かたつむり
おかしいな

おうちを しょって あるいてる

おかしくない
おかしくない

てきにあつたら もぐりこむ

かたつむり
おかしいな

おなが そっくり あしに なる

あしが おおきけりや あんぜんだ

かたつむり
のろいなあ

うごかないのと おんなじだ

のろくつたつて

のろくつたつて

とまらなけりや いいんだよ

けんかならこい

谷川俊太郎

けんかならこい はだかこい
はだかでくるのが こわいなら
てんぷらなべを かぶってこい
ちんぽこじやまなら にぎってこい

けんかならこい ひとりこい
ひとりでくるのが こわいなら
よめさん さんにん つれてこい
のどがかわけば さけのんでこい

けんかならこい はじってこい
はしつてくるのが こわいなら
おんぼろろけつと のってこい
きょうがだめなら おとといこい

おならうた

谷川俊太郎

いもくつて ぶ
くりくつて ぼ
すかして へ
ごめんよ ぼ
おふろで ぽ
こつそり す
あわてて ぷ
ふたりで ぴよ

いしは いつから

いしは いつから 二二二にいる
いしは いままで いちおくねん
いや いちおくねんより なおむかし
いしは いつまで 二二二にいる
いしに きいても 二二二にいない

こんな じゃんけん しってる

川崎 洋

じゃんけんじゃがいもさつまいも
あいこでアメリカヨーロツパ！
ちっけた！
しゅしゅぽ！
はーせつせつせ！
じゃらけつぽん！
ほっちゃんほい！
あらちやちよい！
じゃこんのち！
ちやーろーえす！
きつきつぱ！
じゃすこんぺー！
じっけつせ！
いーんじゃんでほい！
じゃんけつぽほい！
じゃんけんざらめがすいきつた！
りーしやつた！
えいさーほい！
どんちーほい！
えつとう！

スピードかぞえうた

川崎 洋

ひとくいざめのむしば
きゆうけつきにんにく
しょうべんごぞうのへそ
おねしよしてしかられた
かぜごぞうひびごぞう
ライオンとにらめつこ
とうさんのでかいくつ
うちゆうじんとじゃんけん
カバはばかのはんたい
これでひやくかぞえたよ

お経

阪田 寛夫

でんしゃあはあしやあじいだつしやあ
電車馬車自動車
じんりきしやありまいてんしやあ
人力車力自転車
こうつうじいこつうまじんしやあ
交通地獄通勤者
じゅうけんじいこくちかあつうじい
受験地獄中高生
がっしょうれんしゅうだつちゅうひい
合唱練習土曜日
くうかくきいたくばんじゅうはあん
空腹帰宅晩御飯

さかなやの おっちゃん

畑中 圭一

さあ こうてや こうてや
ててかむ イワシやでえ
おてて かみまつせ

ほんまかいな
おっちゃん

さあ こうてや こうてや
とれとれの イワシやでえ
まだ およぎまつせ

そんな あほな
おっちゃん

さあ こうてや こうてや
ぴんぴんの イワシやでえ
ぴぴんと はねまつせ

もう やめとき
おっちゃん

なまけ忍者

—それはもうひとりのぼく—

しょうじ たけし
ぼくの へやの すみっこに
なまけ忍者がかくれてる

ぼくが べんきよう していると

なまけ忍者の ひくい 声
—ちよつと テレビを つけてくれ
つづきまんがを 見たいのじゃ

なまけ忍者に さそわれて
ぼくもテレビを 見てしまう

ぼくが おそうじ はじめると
なまけ忍者の ひくい 声

—どうせ また すぐ よこれるよ
むだな しごとは やめなされ

なまけ忍者が いるかぎり
なにを やつても ぼくは だめ

なまけ忍者よ おねがいだ
はやく どこかへ 消えてくれ

ゆきがふる

まど みちお

ふるふる ふるふる ゆきが ふる
ゆきを みあげて たつ ぼくに
ふるふる ふるふる ゆきが ふる
とつぜん ぼくは のぼってく
せかいじゅうから ただ ひとり
そらへ そらへと のぼってく
ふと きがつくと ゆきが ふる
ゆきを みあげて たつ ぼくに
ふるふる ふるふる ゆきが ふる



泣虫学校

西篠 八十

泣虫学校は どこですか？
それ、その横丁の つきあたり、
御門の前へ 行ったらば、
エンエン、ノ、シークシク
オンオン、ノ、ピーピー。

ニコニコ学校は、どこですか？
それ、その通りの つきあたり、
御門の前へ 行ったらば、
子どもが そろって うれしさう、
アツハツハ、ノ、エツヘツヘ、
ウツフツ、ノ、オツホツホ。

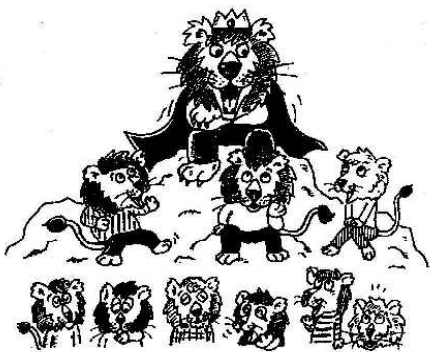
泣虫学校は、をかしいな、
ニコニコ学校へ はいりませう、
朝から晩まで、元氣よく、
父さんも母さんも およろこび
アツハツハ、ノ、エツヘツヘ、
ウツフツ、ノ、オツホツホ。



らいおん

渡邊 美知子

らいおんは
らいおんとよぼう
らいおんでは
王さまらしくない
強そうでない
あんなにりっぱな
たてがみをもっているのに
それではあまりにもかわいそう
らいおんは
らいおんとよぼう
らいおん



つけものの おもし

まど・みちお

つけものの おもしは
あれは なに してるんだ

あそんでるよううで
はたらいてるよううで

おこってるよううで
わらってるよううで

すわってるよううで
ねころんでるよううで

ねぼけてるよううで
りきんでるよううで

こうちむぎのよううで
あっちむぎのよううで

おじいのよううで
おばあのよううで

つけものの おもしは
あれは なんだ

そつとつた

谷川俊太郎

そつとつと そつとつと
うさぎの せなかに
ゆきふるよううに

そつとつと そつとつと
たんぽぽ わたげが
そらとぶ よううに

そつとつと そつとつと
こだまが たにまに
きえさるよううに

そつとつと そつとつと
ひみつを みみに
ささやくよううに

ののはな

谷川俊太郎

はなののののはな
はなのなななに
なずななのはな
なもないのばな

かっぱ

谷川俊太郎

かっぱかっぱらった
かっぱらっぱかっぱらった
とってちってた

かっぱなっぱかった
かっぱなっぱいっぱかった
かっぺきってくった

いるか

谷川俊太郎

いるかいるか
いないかいるか
いないかいないか
いつならいるか
よるならいるか
またきてみるか

いるかいないか
いないかいるか
いるかいるか
いつばいるか
ねているいるか
ゆめみているか

きりなしうた

谷川俊太郎

しゆくだい はやく やりなさい
おなかが すいて できないよ
ほつとけーきを やけば いい
こなが ないから やけません
こなは こなやで うってます
こなやは ぐうぐう ひるねだよ
みず ぶっかけて おこしたら
ばけつに あなが あいている
ふうせんがむで ふさぐのよ
むしばが あるから かめません
はやく はいしやに いきなさい
はいしやは はわいへ いらつてます
でんぼう うって よびもどせ
おかねが ないから できないよ
ぎんこうへ いらつて かりといで
はんこが ないから かりられぬ
じぶんで ほつて つくつたら
まだ しゆくだいが すんでない

わるくち

谷川俊太郎

ぼく なんだいと いらつたら
あいつ なにがなんだいと いらつた
ぼく このやると いらつたら
あいつ ばかやると いらつた
ぼく ぼけなすと いらつたら
あいつ おたんちんと いらつた
ぼく どでどでと いらつたら
あいつ こびこびと いらつた
ぼく がちやらめちやらと いらつたら
あいつ ちよんびにゆるにゆると いらつた
ぼく こぎまりでべれけふんと いらつたら
あいつ それから?と いらつた
そのつぎ なんといえばいいか
ぼく わからなくなりました
しかたないから へーんと いらつたら
あいつ ふーんと いらつた

とる 川崎 洋

はつけよい
すもうとる

こんにちは
ぼうしとる

てんごんの
でまえとる

セーターの
ごみをとる

のらねこの
しゃしんとる

かんごふさん
みやくをとる

おはなみの
ばしよをとる

はんにんの

しもんとる

コーラスの
しきをとる

たんじょうび
としをとる

りりりりり
でんわとる

はやくちうた

川崎 洋

ブリの群れのビリのブリ

このネコはこの子ネコの母ネコ

片目つぶるカタツムリ

なま肉なまハムなまラーメン

父さんトマトまとめて十買った

おでんと都電はぜんぜんちがう

塩焼きむし焼きつけ焼きすき焼き

寝ぞう悪い象もいれば寝ぞういい象もい

る

親カモシカのあとから子カモシカ
だちづでどのさかさほどでつちだ

ばったの歌

おうち やすゆき

ばった

草の色から

ぴよんととびだすばった

じっとしてれば

はっぱとおんなじばった

ぴよんととばなきや

見つからないのにばった

ばった

草の色から

ぴよんととびだすばった

じっとしてたら

はっぱになっちゃうばった

ばつただからね
ぴよんととびたいばつた

かぼちやのつるが

原田 直友

かぼちやのつるが
はい上がり
葉をひろげ
はい上がり
葉をひろげ
葉をひろげ
細い先は
竹をしつかりにぎって
屋根の上に
はい上がり
短くなつた竹の上に
はいあがり
小さなその先たんは
いつせい

赤子のよな手を開いて
ああ 今
空をつかもうとしている。

どきん

たにかわしゅんたろう
谷川俊太郎

さわつてみようかなあ つるつる
おしてみようかなあ ゆらゆら
もすこしおそうかなあ ぐらぐら
もいちどおそうかなあ がらがら
たおれちやつたよなあ えへへ
いんりよくかんじるねえ みしみし
ちきゆうはまわつてるう ぐいぐい
かぜもふいてるよお そよそよ
あるきはじめるかあ ひたひた
だれかがふりむいた! どきん



のはらうた 工藤 直子

おれはかまきり
かまきりりゆうじ

おう なつだぜ
おれは げんきだぜ
あまり ちかよるな
おれの こころも かまも
どきどきするほど
ひかつてるぜ

おう あついで
おれは がんばるぜ
もえる ひをあびて
かまを ふりかざす すがた
わくわくするほど
きまつてるぜ

はきはき

みのむしせつこ

ひとりで ブランコしていたら
とんぼが「あそぼう」と
とんできました
わたしは「はい」というかわりに
かくれてしまいました

そのよる ねどこのなかで

へんじの れんしゅうをしました

「はい！あそびましょ

はい！あそびましょ

はい！あそびましょ

あしたは

はきはき へんじができますように

あしたも

だれかが あそびにきますように

春の歌

草野心平

ほっ まぶしいな。

ほっ うれしいな。

みずはつるつる

かぜはそよそよ

ケルルン クック

ああいいにおいだ。

ケルルン クック

ほっ いぬのふぐりがさいている。

ほっ おおきなくもがうごいてくる。

ケルルン クック

ケルルン クック

えほ 草野 心平

いよう。ぼくだよ。

出てきたよ。

えほがえるだよ。

ぼくだよ。

びつくりしなくてもいいよ。

光がこんな流れたり崩れたりするの
は。

ぼくがぐるぐる見回しているせいではない
だろ。

やりきれんな。

まつ青だな。

においがきんきんするな。

ほっ雲だな。

そっちでもこっちでもぶつぶつなんか鳴き
出したな。

けつとばされる冬。

まぶしいな。

青いな。

やりきれんな。

春君。

ぼくだよ。

いつものえほだよ。

かえるの うたの けいこ

くさの しんぺい

さあ これから うたの けいこだ。

こえの いい ぐりまは たって そう

いった。

ぎやわろろぎやわろろ

そう そう。

ぎやわろろぎやわろろぎやわろろ

ッ

そう そう。

ぎやわろろぎやわろろ

ッ

そらには まんげつ。

まんげつの まわりには おおきな か

さ

さあ みんないっしょに げんきにうたお

う。

いち にい さあん。

ぎやわろろぎやわろろぎやわろろ

ぎやわろろぎやわろろぎやわろろ
ぎやわろろぎやわろろぎやわろろ

河童と蛙

草野 心平

第八満月の夜の満潮時の歓喜の歌

草野心平

十四人以上の人物が同時に唱ふべき詩

河童の皿を月すべり。

じやぶじやぶ水をじやぶつかせ。

かほだけ出して。

おどつてる。

るんるん るんるん

るんるん るんるん

つんつん つんるん

つるんるん つるん

大河童沼のぐるりの山は。

ぐるりの山は息をのみ。

あしだの手だのふりまわし。

月もじやぼじやぼ沸いてゐる。

るんるん るんるん

るんるん るんるん

つんつん つるんるん

つるんるん つるん

立つた。立つた。水のうへ。

河童がいきなりぶるつとたち。

天のあたりをねめまわし。

それから。そのまま。

るるるん るるんぶ

るるんぶ るるん

つんつん つるんぶ

つるんぶ つるん

もうその唄もきこえない。

沼の底から泡がいくつかあがつてきた。

兎と杵の休火山などもはつきり映し。

月だけひとり。

動かない。

ぐぶうとーと聲。

蛙がないた。

ちびへび 工藤 直子

暖ったかいのだもの

散歩はしたいよ

ちびへびは

おうちに鍵をかけて

ぶらぶらでかけた

こんちわというと

小鳥はピヤツと飛びあがり

いたちはナンデとすごんだ

あら おびに短したすきに長しねと

仲間は忍び笑いをした

ちびへびは急いで家にもどり

おうちの中から鍵をかけ

燃え残りの蚊取り線香のように

まるくなって、ねむった

でも……

暖ったかいのだもの

散歩はしたいよ

ちびへびは

もういちど でかけた

誰もいないところまで

——こんちわ いわずに

——ぶらぶら しないで

わらわれたっていいのです

つじた とうぞう

かねちゃんか ろうかで

おしっこを もらして なきました

みんなが くすくすわらった とき

あしのわるい かつちゃんが

ばけつに みずを くんて きて

さつさと ふいて やりました。

みんなが くすくす わらいだし

おべっかだ。

むり すんなよと いいました。

べろを ぺろっと だしました。

でも、かつちゃんは へいきなかおで

ぞうきんあらいに いきました。

びっ「 ひきひき おりて いくとき

あたいが いくよと

おもわず わたしが かけて いったら

じゃ ふたりでねと かっちゃんは
にっこり わらって いました。
それから ふたりで
れんげの はな つんで かえりました。

島

新美南吉

島であるあさ

鯨がとれた

どこの家でも

鯨をたべた

ひげは呻うなりに

売られていった

りらら油は

ランプでもえた

鯨の話が

どこでもされた

島は小さな
まずしい
村だ

冬の夜道

冬の夜道を

一人の男が帰ってゆく

はげしい仕事をする人だ

その疲れきった足どりが

そっくりそれを表している

月夜であった

小砂利を踏んで

やがて 一軒の家の前に

立ちどまった

それから ゆっくり格子戸を開けた

「お帰りなさい。」

土間に灯が洩れて

女の人の声がした

すると それに続いて

どこか 部屋の隅から

一つの小さな声が云った

又一つ

また一つ別の小さな声が叫んだ

「お帰りなさい。」

冬の夜道は 月が出て

ずい分あかるかった

それにもまして

ゆきずりの私の心には

明るい一本のろうそくが燃えていた

津村 信夫

風景 山村暮鳥

純銀もぎいく

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

いちめんのなのはな

かすかなるむぎぶえ

いちめんのなのはな

いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
ひばりのおしゃべり
いちめんのなののはな

いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな
いちめんのなののはな

あめ 山田 今次

あめ あめ あめ あめ
あめ あめ あめ あめ
あめは ぼくらを ざんざか たたく
ざんざか ざんざか
ざんざん ざかざか
あめは ざんざん ざかざか ざかざか
ほったてごやを ねらうたたく
ぼくらの くらしを びしびし たたく
さびが ざりざり はげてる やねを
やすむ ことなく しきりに たたく
ふる ふる ふる ふる
ふる ふる ふる ふる
あめは ざんざん ざかざん ざかざん
ざかざん ざかざん
ざんざん ざかざか
つきから つぎへと ざかざか ざかざか
みみにも むねにも しみこむ ほどこ
ぼくらの くらしを かこんで たたく

お祭

北原白秋

わっしよい、わっしよい、
わっしよい、わっしよい。
祭だ、 祭だ。
背中に 花笠、
胸には 腹がけ
向こう鉢巻、そろいの半被で、
わっしよい、わっしよい。

わっしよい、わっしよい、
わっしよい、わっしよい。

御輿だ、 御輿だ。

御輿のお練だ。

山椒は粒でも、ピリッと辛いぞ。

これでも勇みの 山王の氏子だ。

わっしよい、わっしよい。

わっしよい、わっしよい、

わっしよい、わっしよい。

真っ赤だ、真っ赤だ。夕焼け小焼けだ。

すっかり担いだ。

明日も天気だ。そら揉め、揉め、揉め、
わっしよい、わっしよい。

わっしよい、わっしよい。

俺らの御輿だ、死んでも離すな。

泣虫やすつ飛べ。差し上げて廻した。

揉め、揉め、揉め、揉め。

わっしよい、わっしよい。

わっしよい、わっしよい、

わっしよい、わっしよい。

廻すぞ、廻すぞ。

金魚屋も逃げる。鬼灯屋もにげる。

ぶつかったって知らぬぞ。

そら退け、退け、退け。

わっしよい、わっしよい。

わっしよい、わっしよい、

わっしよい、わっしよい。

子供の祭だ。祭だ。祭だ。

提灯点ける

御神燈献げる。

十五夜お月様まんまるだ。

わっしよい、わっしよい。

どいてんか 島田陽子

わっしよい、わっしよい、
わっしよい、わっしよい。

あの声何処だ。

あの笛何処だ。

あつちも祭だ。こつちも祭だ。

そら揉め、揉め、揉め。

わっしよい、わっしよい。

わっしよい、わっしよい、

わっしよい、わっしよい。

祭だ、祭だ。

山王の祭だ。子供の祭だ。

お月様紅いぞ。御神燈も赤いぞ。

そら揉め、揉め、揉め。

わっしよい、わっしよい、

わっしよい、わっしよい、

わっしよい、わっしよい。

どいてんか

どいてんか

おんなのみこしや

どいてんか

みんなではやせば

つゆぞら はれる

わっしよい わっしよい

どいてんか

どいてんか

どいてんか

おんなのみこしや

どいてんか

みんなではしれば

うなるよ かげが

びゅうん びゅうん

どいてんか

春 坂本 遼

おかんはたったひとり
峠田のつぺんで鰻にもたれ
大きな空に
ちっちゃいからだを
ぴよっくり浮かして
空いつぱいになく雲雀の声を
じっと聞いているやろで

里のほうで牛がないたら
じっと余韻に耳をかたむけているやろで

大きい 美しい
春がまわってくるたんびに
おかんの年がよるのが
目に見えるようで かなしい
おかんが みたい

鰻釣 山村暮鳥

父よ
おいらも
いきてえな
大きな海のまん中で
おいらも鰻がつってみてえな
おいらも
船にのりてえな

まってる
まってる
その腕が檜の木のようになるまで

雲

山村 暮鳥

おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきそうじゃないか
どこまでゆくんだ
ずっと磐城平の方までゆくんか

汽笛 五年男子

あの汽笛
田んぼにも
きこえただろ
もうあばがかえるよ
八重蔵
なくなよ

うち 知ってんねん
島田 陽子

あの子 かなわんねん
かくれてて おどかしやるし
そうじは なまけやるし
わるさばっかし しやんねん
そやけど
よわい子オには やさしいねん
うち 知ってんねん
あの子 かなわんねん
うちのくつ かくしやるし

サンマのひらきがなんなのだ
サンマばかりがマンマじゃないのだ
のだのだのだともそうなのだ
それは断然そうなのだ
雄々しくネコは生きるのだ
ひとりでネコは生きるのだ
激しくネコは生きるのだ
堂々ネコは生きるのだ
きりりとネコは生きるのだ
なんとかかんとか生きるのだ
どうやらこうやら生きるのだ
しょうこりもなく生きるのだ
出たとこ勝負で生きるのだ
ちやつかりぬけぬけ生きるのだ
破れかぶれで生きるのだ
いけしやあしやあと生きるのだ
めったやたらに生きるのだ
決して死んではならぬのだ
のだのだのだともそうなのだ
それは断然そうなのだ

夜

小四 女子

お母さんがなくなつてから
おとうさんは四角なはん台を使わなくな
つた

「これにしよう」
といて、いつも

小さな円いはん台を

暗い電とうの下にもつてくる

わたしたちきょうだいは、

その円いはん台をかこんで食事をする

お父さんが

なれない手つきでござんだ

あついうすいのあるたくあんを

コリコリとかんで

静かな食事をする

雨ニモマケズ

宮沢 賢治

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

欲ハナク

決シテイカラズ

イツモシズカニワラツテイル

一日ニ玄米四合ト

ミソト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノカゲノ

小サナ萱ブキノ小屋ニイテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ツテソノ稲ノ束ヲ負イ

南ニ死ニソウナ人アレバ

行ツテコワガラナクテモイトイ

北ニケンカヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイ

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボウトヨバレ

ホメラレモセズ
クニモサレズ
ソウイウモノニ
ワタシハナリタイ

生きる

谷川俊太郎

生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木もれ陽がまぶしいということ
ふつと或るメロディを思い出すということ
くしやみすること
あなたと手をつなぐこと
あなたと手をつなぐこと
あなたと手をつなぐこと
生きているということ
いま生きているということ
それはミニスカート
それはプラネタリウム
それはヨハン・シュトラウス
それはピカソ

それはアルプス
すべての美しいものに会おうということ
そして
かくされた悪を注意深く「ばむ」と

生きているということ
いま生きているということ
泣けるということ
笑えるということ
怒れるということ
自由ということ
自由ということ
自由ということ

生きているということ
いま生きているということ
いま遠くで犬が吠えるということ
いま地球が廻っているということ
いまだどこかで産声があがるということ
いまだどこかで兵士が傷つくということ
いまぶらんこがゆれているということ
いまいまが過ぎてゆくこと
いまいまが過ぎてゆくこと
生きているということ

いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はとどろくということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ

雪

三好 達治

太郎をねむらせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎をねむらせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

こんな教室作ろうやあ

教室は まちがうところだ

みんながどしどし手をあげて

まちがった意見を言おうじゃないか

まちがった答えを言おうじゃないか

まちがったものをワラツちやいけない

まちがった意見を

まちがった答えを

ああじゃないか

こうじゃないかと

みんなで出し合い言い合うなかで

ほんとのものを

見つけていくのだ

いつも正しくまちがいのない

答えをしなくちゃならんと思って

そういうことだと思っているから

まちがうことが こわくてこわくて

手もあげないで 小さくなって

だまりこくって 時間がすぎる

しかたがないから 先生だけが

かつてにしゃべって

生徒はうわのそら

それじゃ ちっとも

伸びてはいけない

神様でさえ

まちがう世の中

ましてこれから人間になろうと

している ぼくらが

まちがったって なにがおかしい

あたりまえじゃないか

うつむき うつむき

そうと あげた手

はしめて あげた手

先生が さした

どきりとむねが大きく鳴って

どきつどきつとからだもえて

立ったとたんにわすれてしまった

なんだかぼそぼそしゃべったけれど

なにを言ったかちんぷんかんぷん

わたしは ことりと

すわってしまった

からだがすうつと涼しくなって

ああ言やあ よかった

こう言やあ よかった

あとでいいこと うかんでくるのに

それでいいのだ

いくども いくども

おなじことをくりかえすうちに

それから だんだん どきりがやんで

言いたいことが 言えてくるのだ

はじめから うまく言えるはずないんだ

なんどもなんども言っているうちに

言いたいことの半分くらいは

どうやらこうやら言えてくるのだ

そうしてたまには答えもあたる

まちがいだらけのぼくらの教室

おそれちゃいけない

ワラツちやいけない

安心して 手をあげる

安心して まちがえや

まちがえたって ワラツたり

ばかにしたり おこったり
そんなもんは おりやせん
まちがえたつて だれかが
なおしてくれるし

教えてくれる

こまつた時には 先生がよ
うないちえしぼつて 教えるで

そんな教室作ろうやあ

おまえへんだと言われたつて
そりやちがうと言われたつて
そう思うんだからしょうがない
だれかが かりにも わらつたら
そう思うんだ なにがわるい
まちがつてることが
わかればヨ一

人が言おうが 言うまいが
おらあ自分で あらためらあ
わからなけりや そのかわり
だれが言おうと こづこづと
おらあ 根性まげねえだ

そんな教室作ろうや

ふるさと

室生犀星

雪あたたかくとけにけり
しとしととと融けるゆけり
ひとりつつしみふかく
やはらかく
木の芽に息をふきかけり
もえよ
木の芽のうすみどり
もえよ
木の芽のうすみどり

北の春

丸山 薫

どうだろう
この沢鳴りの音は
山々の雪をあつめて

轟々と谷にあふれて流れくだる

この凄まじい水音は

緩みかけた雪の下から

一つ一つ木の枝がはね起きる

それらは固い芽の珠をつけ

不敵な鞭のように

人の額をうつ

やがて山裾の林はうつすらと

緑色に色づくだろう

その中に早くも

辛夷の白い花もひらくだろう

朝早く 授業のはじめに

一人の女の子が手を挙げた

——先生 燕がきました。

道程

高村 光太郎

僕の前に道はない

僕の後ろに道はできる

ああ 自然よ

父よ

僕を一人立ちさせた広大な父よ
僕からメロディ離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため

われは草なり

高見 順

一本一本

北川 冬彦

繁茂した森林も好きだが
それにもまして好ましいのは
凍てついた曠野の疎林だ
そこでは樹々は
裸で 何の虚飾もない
互いによりかかろうとしていない
一本一本

われは草なり
伸びんとす
伸びられるとき
伸びんとす
伸びられぬ日は
伸びぬなり
伸びられる日は
伸びるなり

ああ 生きる日の
美しき
ああ 生きる日の
楽しさよ
われは草なり
生きんとす
草のいのちを
生きんとす

めいめい独立して
厳冬に耐えている
その姿のいじらしく
雄々しく

われは草なり
緑なり
緑の深きを願ふなり